

【FD・SD ニュースレター】

2024 No.4

2025年
3月発行

FD・SD News Letter

教育研究推進センター長 ご挨拶

皆様方におかれましては、日頃より教育研究推進センターの活動にご理解・ご協力頂き、誠にありがとうございます。

ご存じの通り、2024年度、全国の私立大学の53.3%において、入学者数が定員割れとなりました。この問題の大きな要因として、大学進学者数の頭打ちと少子化による18歳人口減少であることは周知の通りです。その中でも2025年問題が即時に対応すべき課題であり、いわゆる団塊の世代が75歳以上の後期高齢者となり、日本社会の超高齢社会によって社会システムに様々な歪みが生じることにあります。数年前まで120万人いた入学年次に当たる18歳人口が、すでに110万人に減少しており、さらにこれが激減傾向であることが大きな問題になっています。

この少子化問題は、今に始まった話ではありませんが、文部科学省は2018年に中央教育審議会において「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」をとりまとめました。このグランドデザインの中では、「留学生の受け入れ増加」、「リカレント、リスキリングの需要増加」で対応しようとしたのですが、わが国を選ぶ留学生は思うようには伸びておらず、社会人のリカレント、リスキリング需要を合わせても、全国の定員割れ問題を解決するに至ってはおりません。

これらの問題に対応するには、使い古された考え方ではありますが、やはり受験者やそのステークホルダのニーズをいち早く察知し、適切なタイミングで大学における学部・学科の再構築を含んだ大再編が、再度重要になってきています。現在の学部・学科の再構築では、まず、支援事業による助成を計画の中に含めながら、将来構想そのものを描き直すことも重要であると考えられます。また、当初の効果は



教育研究推進センター長 石原 俊一

限定的に見えるかもしれませんが、カリキュラム変更による履修モデルの複線化(コース増)や名称変更も初手としては有効であると考えます。本学のあるべき将来像におけ、小目標から早めに着手し、段階的に大がかりな改組(再編)に取り組み、確実な方法で継続的に積み上げていく手法、すなわちシェイピング法を用いることが重要です。そして、その動きは計画的かつ性急さが、以前の改組(再編)より求められることになります。

当センターとしても、教育・研究の支援をできるよう対応していきたく考えます。

皆様方におかれましては、教育研究推進センターの活動にご協力頂くことが多々あるかと存じますが、何卒よろしくごお願い申し上げます。

授業アンケートの活用

教育学部

2023年度秋学期授業アンケート結果を利用したFD 活動

(I) 2023年度教育活動の振り返り、アンケートの結果に関する考察、意見交換の結果

今回のFD研修会では、Googleフォームを用いて、教育学部教員に対して事前アンケートを実施した。担当授業のアンケート結果を確認し、主にQ5「授業外学修時間」、Q7「主体的学修行動(比較的低数値の答え)」について問いに答える形で行った。併せて、Q6「学修意欲」、Q9「主体的に考える」、Q10「協働的活)、Q13「知識・スキルの獲得」、Q14「新しいものの見方・考え方」、Q15「学修・研究への興味・意欲」などに関連する授業の工夫についても自由回答する形で実施した。

1. 2023年秋学期 教育学部全体の授業アンケート結果の共有・考察

大学全体の傾向と大きな差異は無い。レーダーチャートを確認すると、大きく凹んでいるのがQ5の授業外学習時間である。各授業で目安とされている授業外学修時間は異なる為、一概に短いとは言い切れないが、1つの授業に30分~1時間というのが最も多い結果になっている。

また、大学全体結果より低数値なのが、例年同様、Q3「履修登録するうえでシラバスを参考にしましたか」である。資格取得に関連する授業が多いため、シラバスを読む、という行動は省略されがちと推測される。

大学全体より数値が高いのは、例年同様Q10「学生同士が協働的に活動する場面はありましたか」で平均値が大学全体3.6に対して4.1となっており、多くの授業で協働的な活動が推進されていることが伺える。Q3のシラバス関連項目以外はすべて大学全体の数値を上回っており、教育学部の学生が、比較的真面目な学びの姿勢をもっていることが伺える。

Q7「この授業の内容の理解を深めるために、主体的に行ったことはありますか」では、「予習・復習」「ICTを利用して調べる」「友人と協力しながら学ぶ」は高数値だが、「関連書籍や論文を読む」「図書館やコンピュータ教室等の大学の施設を利用して」が低い数値になっている。

2. FD研修会事前アンケート結果の共有

1) 授業外学修時間の授業アンケート結果が、シラバスに設定している時間をほぼ充足またはそれ以上、という教員による「授業の工夫」「学生の実態」を共有した。

内容は、「自律的学修」「毎週の課題」「発表活動」「予習・復習内容の具体化」「テキストの事前事後の読み込みの重要性を何度も指示」「manabaのコースコンテンツの活用」「毎回のミニレポート課題」「考えることを重視する課題」「反転学習と研究プレゼンテーション」「講義中に情報収集したものを発表」「宿題や模擬授業の準備」「実験科目でのレポート作成」「発表に向けた主体的な計画と準備・練習が必須」「プロジェクト型学習」等の授業形態に合わせた工夫を共有した。

2) 教科書以外の関連書籍や論文を読んで学修した、という授業アンケート結果が学部平均値より高い教員による「主体的学修の促し方」について共有した。

内容は、「図書館での調べ学習機会を作る」「授業前に検索サイトの利用方法・文献の掲示方法をデータ化し紙・manabaで掲示」「テーマを指定して関連書籍や論文を探させる」「お勧めの本の質問などに積極的に答える」「関連図書リストをmanabaで配信、授業中に提示」「反転学習に加えてディベートを取り入れる」「提示事例の原因と類似事例を調べ発表させる」等の方法を共有した。

3) 図書館やコンピュータ教室等の大学の施設を利用して学修した、という授業アンケート結果が学部平均値より高い教員による、その「要因」や「学生に向けての具体的な働きかけ」等について共有した。

内容は、「ICTを利用した学修方法を教える」「図書館の利用方法・検索方法を直接指導した」「図書館のどこにどのような書籍があるかを伝える」「参考になりそうな書名を提示」「図書館のデータベースから参考文献を検索し整理する指導を行う」「図書館ガイダンスを実施」等の働きかけ方を共有した。

4) Q6「学修意欲」、Q9「主体的に考える」、Q10「協働的活動」、Q13「知識・スキルの獲得」、Q14「新しいものの見方・考え方」、Q15「学修・研究への興味・意欲」などに関連する授業の工夫について共有した。

授業アンケートの活用

内容は「授業ゴールの達成方法を学生が決められるようにする」「暗記ではなく、一人ではなく、対話的にアイデアを出し合う授業形態」「学びを深化させる発表活動やプロジェクトを設定する」「授業導入時に社会事象から『今日の無駄話』を提供する」「新聞記事の活用」「理解しづらい概念的理論は具体的な教育実践に結び付けて話す」「知識・スキルを授業で紹介するだけに留まらず実際にやってみる、スパイラルに機会をみつけて繰り返す」「演習やグループディスカッションを積極的に取り入れる」「研究室にて資料提供や質問等への支援が可能であることを伝え、事前事後の支援を行う」「最近の教育の動向などを積極的に紹介し、授業で取り上げ議論する時間を作っている」「適切な『てびき』を指導し学生間での相互的な討議と共同が促され、新たな視点の発見につながる」「協働的な学びをすべての授業に取り入れ、毎回思考スキルを啓発するワークシートと教育通信を配布する」「教えすぎない、聞かれたらどんな分野の質問でも答える」「自分や家族に身近な事例を示し家庭での会話を促す」「グループ活動の際は教員がメンバーを指定し、課題ごとに流動的に変える」「リ

アクションペーパーに書かれた質問にすべて回答する」「理論と実際の関連を印象付けるようにする」「教材プリントには各自で記入するスペースを設ける」「前時授業で興味があったことについて調べプレゼンさせる」等、多数の工夫や方法を共有した。

教員各々が、授業内容や形態に合わせて工夫していることが共有され、今後の授業運営に生かされていくことが期待される。

(2) 次期に向けた課題

(授業方法の改善、教育課程の改善など)

今回行ったFD講習会に向けての事前アンケートは、各担当科目の結果を確認して回答する流れであった。それによって学生の回答数の少なさ、授業アンケート項目の答えにくさ等の気づき、manabaでの結果確認の煩雑さについての指摘が生まれた。せっかくの授業改善のためのアンケートであるから、できるだけ多くの学生に回答してもらえよう働きかけ、より精度の高い数値から引き続き課題を探っていききたい。

人間科学部

2023年度秋学期授業アンケート結果を利用したFD 活動

(1) 2023年度教育活動の振り返り、アンケートの結果に関する考察、意見交換の結果

アンケート結果については、事前に資料を配布し、参加者はそれに目を通した上でFD研修会に臨んだ。当日は、センター主任の上ノ原先生より以下の内容の説明を行った。

アンケート結果については、事前に資料を配布し、参加者はそれに目を通した上でFD研修会に臨んだ。当日は、センター主任の上ノ原先生より以下の内容の説明を行った。

○回収率

- 回収率は32.5%で、2022年度(28.9%)、2021年度(28.7%)から上昇している。
- 大学全体の回収率は27.0%で、人間科学部の回収率が最も高い。

○Q5 授業時間外の学修時間

- 約30分以下が6割近くを占めており、2割近くが全く授業時間外の学修を行っていない。シラバスで求められている週4時間の予習・復習には全く達していない。

- 学修時間の平均は44.6分(「2時間以上」は2時間とみなした)。2021年度は50.2分、2022年度は47.3分で、減少傾向にある。
- 大学全体での平均は51.4分。人間科学部の学修時間は全学部の中で最も短い。

○Q6 意欲的取り組み

- おおむね意欲的に取り組んでいるといえる。
- 平均スコアは4.1(大学全体は4.2)。2022年度の平均も4.1で変化なし。

○Q7 主体的な学習内容

- 2022年度と比べると全体的な傾向に違いはないが、「パソコンやスマートフォンなどのICTを利用して調べ学修」「図書館やコンピュータ教室等の大学の施設を利用して学修」が減少、「友人と協力しながら学修」が増加している。

授業アンケートの活用

- 大学全体の回答と比べると、「友人と協力しながら学修した」の回答率が約5ポイント低い。

○Q9 学生が主体的に考える場面

- 「非常にあった」と「ややあった」と合わせて76%に達しており、おおむね肯定的な評価といえる。スコアの平均は4.0(大学全体では4.2)。
- 2023年度から質問文が変更になっており、過年度との比較はできない。

○Q10 学生同士が協働的に活動する場面

- 「非常にあった」と「ややあった」と合わせても半数に満たず(49.0%)、約3分の1が「あまりなかった」または「まったくなかった」と回答している。スコアの平均は3.2で、大学全体(3.6)と比べると差がある。
- 2023年度から質問文が変更になっており、過年度との比較はできない。

○Q13 この授業で、知識・スキルがどの程度得られましたか。

○Q14 この授業で、新しいものの見方・考え方がどの程度得られましたか。

○Q15 この授業で、学問や研究への興味・意欲がどの程度湧きましたか。

- 3つの質問で回答の傾向に大きな差はないが、「興味・意欲」については肯定的な回答がやや少ない(他学部でも同様の傾向)。スコアの平均は、「知識スキル」が4.2、「見方・考え方」が4.2、「興味・意欲」が4.0で、2022年度(4.2/4.2/4.0)から変化はない。

○小括

アンケート結果から、本学部の学生はおおむね主体的、意欲的に授業に取り組んでおり、授業に対する満足度も高い。一方、授業外の学修時間が短く、また、(学部により授業の形態が異なるため直接的な比較はできないものの)協働的な学修の機会が少ない傾向がみられる。

以上の内容を踏まえた上で、本学部の教育の課題、授

業改善の方策、ならびにアンケートの方法や内容について意見や情報提供を求めたところ、以下のような意見が出された。

○協働的な学習の機会の少なさについて(Q10およびQ7に関連)

- 講義形式の授業や大規模授業が多いことが影響しているのではないか。
- グループワーク等が少ない授業の回答が多く反映されているのではないか。
- グループワークを行っていても、「協働的な活動」と認識されていないのではないか。
- 学生の質が変わってきていて、グループワークを指示してもうまくできない学生が出てきている。グループワークが協働になっていない場合もある。
- 学部の性質上、グループワークが得意な学生ばかりというわけではない。

○授業外の学習時間の短さについて(Q5に関連)

- 講義形式の授業が多いことが影響しているかもしれないが、だからといって現状で良いわけではない。授業外の学習の必要性を認識できていない学生もいるので、予習・復習が必要であることや、予習・復習の内容をきちんと伝える取り組みが必要ではないか。
- そもそも何を予習・復習すればいいのか、わからない学生もいるのではないか。
- 点数や評価には敏感なので、小テストをすれば学生はよく勉強するようだ。

○その他

- 授業ごとの回収率の違いが結果に影響している可能性があるため、授業ごとの回収状況などのデータがほしい。

(2) 次期に向けた課題

(授業方法の改善、教育課程の改善など)

- 予習・復習が必要であることや、予習・復習の内容について、授業の中で伝える取り組みを行なっていくこと。
- グループワークを取り入れるだけでなく、グループワークが協働的な学修の場として機能するように配慮すること。

授業アンケートの活用

文学部

2023年度秋学期授業アンケート結果を利用したFD 活動

(1) 2023年度教育活動の振り返り、アンケートの結果に関する考察、意見交換の結果**【アンケート結果に関する考察】**

アンケート集計結果については、重点項目を取り上げ、教育部門担当(神田)より以下のように説明を行った。

「Q5・授業時間あたりの授業外学修時間について」

5+4+3(1時間以上行っている)は50.7%で、回答者のおおむね半分が1時間以上の時間外学修に取り組んでいる。ただ、昨年度は52.7%、一昨年度は62.9%であり、年々下がっている。なお、2023年度春学期は50%であり、学期による変動はあまり見られない。

全体平均と文学部平均(区分平均)は同値なので、平均的な数値といえる。

「Q6・授業での学修に意欲的に取り組んだか」

5+4は87.2%で回答者の9割近くが、意欲的に取り組んだと回答している。昨

年および一昨年(ともに87%)とほぼ同値である。なお2023年度春学期は87.4%

で学期による変動はほぼ見られない。区分平均は全体平均よりやや高めである。

「Q7・授業の理解を深めるために主体的に行った活動」

シラバスにも記載のある「予習・復習」に関連する活動が最も多く、「ICTを利用した調べ学修」と「友人と協力して学修」が次いで多い。

昨年度は、「予習・復習に関連する活動」が43.2%(一昨年44.8%)、「ICTを利用した学修」が36.5%(一昨年45.3%)、「友人と協力して学修」は36.4%(一昨年31.9%)となっている。「予習・復習」については年々やや低下傾向がみられる。一方、「ICT利用」は昨年度とほぼ同等であり、「友人と協力」はやや増加傾向にある。なお、春学期は「予習・復習」「ICT利用」は秋学期とほぼ同程度だが、「友人と協力」は40.8%でやや高い。

また「教科書以外の関連書籍や論文を読んで学修した」

は20.4%であり、2022年度22.3%、2021年度の26.5%、2020年度の34.5%と比較しても低下傾向にある。2023年度春学期は22.1%でやや高い。

文学部の学修においては文献の利用は必須であるが、学生の書籍離れが年々目立ってきていることは懸念される。

「Q9・学生が主体的に考える場面はありましたか」**「Q10・学生同士が協働的に活動する場面はありましたか」**

「主体的に考える場面」については、5+4が84.2%であり、8割以上の学生が主体的に考えながら学修に取り組んでいる。

「協働的に活動する場面」については、5+4が63.1%であり、6割以上の学生が協働して学修に取り組んでいる。

区分平均は、全体平均と同じかやや高めとなっている。また授業内で主体的に考えているという自覚の高い学生が多く、大学の学修に対して明確な目的意識をもっている学生は多いと考えられる。一方、文学部では演習やグループ発表など、協働的な活動が必要な授業はあるが、全体としては平均的な数値に留まる。ただ、実験・グループ実習など協働的な活動を伴う授業の多い学部においても、必ずしも高値とはいえず、授業形式以外の要素(学生の間関係等)に依るところもあると考えられる。

「Q13・知識やスキルがどの程度得られましたか」

5+4が89%となり、昨年度の89.4%、一昨年度の87%とやや同値である。9割弱の学生が「知識・スキルが得られた」と回答している。また2023年度春学期は90%であり、学期による明確な差はみられない。区分平均は全体平均よりやや高いが、平均的といえる。

「Q14・新しいものの見方、考え方がどの程度得られましたか」

4+5は86.6%となり86.9%となり、多くの学生が「新しいものの見方、考え方」を得られたと回答している。昨年は86.9%であり、ほぼ同等である。また2023年度春学期は87%であり、学期による差はほぼ見られない。

授業アンケートの活用

「Q15・学問や研究への興味、意欲がどの程度湧きましたか」

5+4 は 82.7%であり、8 割以上の学生が学問・研究への興味・意欲を得られたと回答している。昨年は 83.5%、一昨年は 83.2%でほぼ同値となる。なお 2023年度春学期は 83.9%であり、わずかに春学期の方が高い。

「知識・スキル」「新しいものの見方・考え方」に比べるとやや低値だが、学年や科目によって差がつく項目であるといえる。「学修」から「学問・研究」への意識変化にもかかわるであろうし、学生が「学修」（「学習」との違いを含めて）をどのように認識しているか、という点にもかかわるものと考えられる。

また、今回の FD で特に重点的に取り上げる「Q5・授業外の学修時間」について考察する上で、研究部門担当（鷲麗美知）から報告を行った。アメリカに比べ、日本の大学生は履修科目数、必要単位が多く、授業時間も長い傾向にある。また、オハイオ州立大学の研究によると、毎週勉強に費やす時間が 1 時間増えるごとに GPA がわずか 0.025 しか上昇していないことも報告されている。

学修時間以外に日本の大学生が時間を使っているのは、インターネット利用であり、その内訳は動画の視聴や SNS、ゲームなどが大半を占めている。こうした時間を自分で管理し、学修に振り分けることに意識的になるような働きかけが必要ではないか、といった指摘がなされた。

【意見交換】

文学部の四学科より、各学科での状況をふまえ、主に Q5、Q7 の項目について学科長からそれぞれ以下のコメントが出された。

日本語日本文学科

学修時間を増やすことだけではなく、限られた時間であっても、より効率的・効果的な時間外学修を行わせるための授業者の働きかけも重要である。演習において発表者は学修外時間を使って準備するが、発表者以外にも、演習に参加するための準備や、リアクションペーパー・コメントペーパーの作成を行うこと、予習が必須の学修活動を授業内で取り入れるなど、授業外学修を前提とする授業づくりが

必要となろう。また書籍などの利用を増やすために、授業と図書館調査を連携するなど、図書館の利用促進も進める。また教員の指示や働きかけも重要である。日文の多くの科目では、すでに上記のような内容を取り入れている。ただ、実際に自分がこうした活動を行っているという自覚を、学生に持たせることが必要である。

英米語英米文学科

書籍利用もさることながら、ICT の利用については、現在の社会状況を考えれば、むしろ少なすぎるともいえる。積極的に利用する流れを、授業を通じて作っていく方がよい。またシラバスを確認する学生が少ないことも懸念される。シラバスをきちんと確認する仕組みが必要である。また FD を専任教員だけで行うのではなく、非常勤講師もふくめ、本学の授業に関わる教員全体の職能開発に役立てるべきであろう。

中国語中学文学科

授業外の学修時間は少ない傾向にあり、高校までに授業外の学修を行う習慣 がついていない学生が増えている。授業内でこまめに確認テストを行うなど、授業外の学修が必須となる授業づくりなどを心掛けている。また3年生以降、専門に分かれた研究が始まると、学修に対する意識が上がる印象である。このために、下級生のうちから学習意欲を促す取り組みを地道に続けることが重要と考える。また書籍や論文の利用が少ない点に関しては、図書館に行かせる工夫や、ゼミで論文の分析を行うなど授業内での取り組みを行っている。

外国語学科

大学教育学会などでは、AI を大学の授業に積極的に取り入れる方向での検討がさかんである。むしろこれからは AI を含め、ICT を利用した学修・研究が増えることも予想され、教員の側がやや保守的になっていないかと考える。学修時間については、授業外だけに注目するよりも、むしろ授業中にいかに集中して学修できるかを重視したい。また外国語学科では、留学が必須であることもあり、下級生のうちから目標意識が高く、モチベーションも高い。とはいえ、留学後にも、モチベーションを保ち続けさせることが、学科

授業アンケートの活用

としての今後の課題である。

またこれを受けて、学部の教員からは、以下のような意見が出された。

シラバスの内容も、指定される項目が増え、授業内容を学生が適切に読み取りやすい状態とはいえない。むしろ個々の授業で、授業に必要な学修などを、教員が具体的に説明することが重要である。

(2) 次期に向けた課題

(授業方法の改善、教育課程の改善など)

アンケート集計結果全体としては、多くの項目について4を超えている。文学部としては、学生との双方向の学び、学生同士が協働する学修などが達成できており、また授業から、学問・研究への意欲、スキル獲得が達成できたと考える学生も多いと思われる。

一方で、「授業時間外での学修」には依然、課題が残る。

学生の授業時間や取得単位数も多いことなどから、ただ授業外の学修時間を延ばすことだけに注力するのではなく、より効率的・効果的な学修方法や、授業中に集中して学修することも重視していきたい。これには、授業の進め方や、教員からの働きかけも重要となる。ICTやAIの有効な活用についても、今後は実際の授業例などに即して、具体的に検討される必要がある。学部の専任教員だけにとどまらず、非常勤も含めて関連する教員全体が、授業に関わる問題意識を共有する場なども必要となるだろう。

また学修を、「教室の中だけの活動」「机の前での勉強」のように狭義に捉えてしまい、自主的な読書や文章作成、日常において外国語・文化に触れることなど、文学部の学修としての広範な取り組みをすでに行っているが、それを「学修」と認識する学生が少ないと考えられる。こうした「学修」の認識を、教員と学生が共有することは、学問と日常、自分の生活や社会とのかかわりを認識しつつ学修を進めるためにも有効であるといえる。

情報学部

2023年度秋学期授業アンケート結果を利用したFD活動

情報学部では下記の(1)と(2)を複合した意見交換を行った。

(1) 2023年度教育活動の振り返り、アンケートの結果に関する考察、意見交換の結果

(2) 次期に向けた課題

(授業方法の改善、教育課程の改善など)

各学科の意見交換およびFD活動についての報告は下記のとおり。

I 情報システム学科

1.1 全体

- 学部ごとのデータなので、学科での傾向というのは見出しにくい部分もある。

1.2 Q5について

- 比較的授業外学習時間が多い。
- 情報システム学科であればプロジェクト演習は必然的に授業外学習時間が多くなる。
- 演習系授業では授業外課題が多いのではないかと。

- ソフトウェア環境などが整っているPC教室など学内に留まることができる学習環境があるからということもある。
- 学習時間の確保はできているのではないかと。
- 授業外学習時間が2時間未満なのは単位の実質化を考えると少ないのではないかと。1時間予習+1時間授業(45分)+1時間復習で、45時間=1単位なので、1授業2単位であれば、授業科目にもよるが4時間以上が時間外での学習時間が必要です。

1.3 Q7について

- 「3.パソコンやスマートフォンなどのICTを利用して調べ学修をした」が多い。

1.4 Q13,Q15について

- 低い。学びたいものが学べたという主観的な達成感に乏しい。
- 成績評価に対して、自己認識ができている、とも言えるのではないかと。

授業アンケートの活用

「非常に湧いた」「やや湧いた」という選択肢の間の広さに違和感があったのではないか(「非常に」ではなく「とても」の方が良いのでは?)という意見があり、程度量表現に関する研究を引用し説明があった。(引用した研究のURLは割愛)

2 情報社会学科

1.1 Q5について

- 過去3年間、授業時間外の学習時間が全体の平均より多い。情報学部の特徴を表していると考えられる。
- 毎回の授業時間外の学習が2時間を超えているが、科目の特徴(演習授業が多いなど)が影響している可能性があるのか。
- 経年変化をみると、学習時間が減少傾向にあり、学習意欲の低下などが懸念される。

1.2 Q7について

- 過去3年間のいずれも、ICT利用が多い傾向がみられ、情報学部の特徴を表していると考えられる。
- ICTを利用した調べ学修が多いが、その内容が気になる(学術論文や報告書等を読んでいるのか)。「書籍や論文を読んで学修した」という選択の割合が全体よりも低いので、ICTを利用した調べ学修では書籍や論文を読んでいる割合は必ずしも高くないのかもしれない。
- 「図書館やコンピュータ教室等の大学の施設を利用して」という選択肢が気になる。分けた方が特徴的な結果が出るように思う。

1.3 Q13について

- 全体と学部の平均はほぼ同じであるが、最も高い選択肢(5)の割合が少なく、4と3の割合が若干高い。知識やスキルが得られることが明確にわかりづらいような授業が一定数あるのか?

1.4 Q15について

- 全体と学部の平均はほぼ同じであるが、最も高い割合を回答した人が全体と比較して少なかった。Q13と合わせて考えると、情報学部の授業は平均的ではあるが、強くインパクトを与えるものになっていないのか気になる。

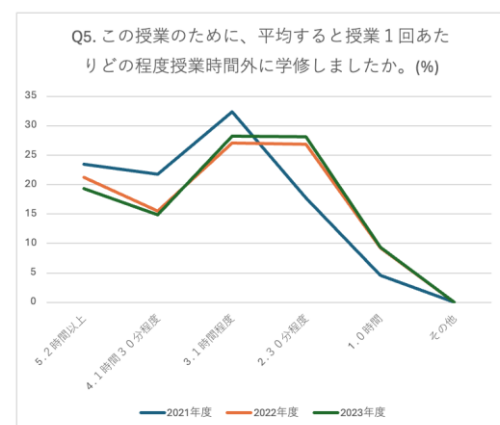
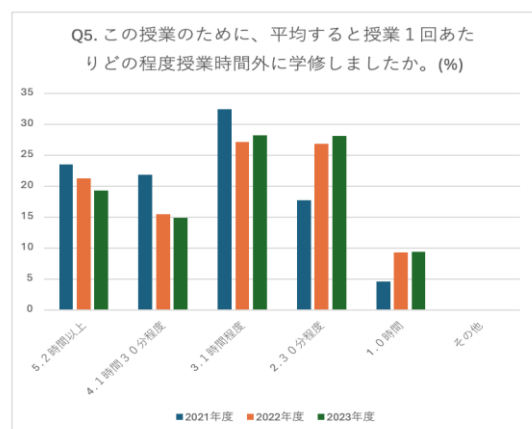
3 メディア表現学科

Q5-①

Q5について、情報学部(専門科目)の部分を出して3年間の推移グラフを作ってみました。2つのグラフは形式が異なるだけで同じデータです。

2時間以上が減って、30分程度が増えている。授業以外で勉強しなくなった? どうしてか? コロナの時期は課題が多かったのか? それでも、2時間以上授業以外で勉強する授業を1日3コマとったら、家で家で最大6時間以上予習・復習することになる。すごいなあ。一方、0時間が10人に一人。30分程度が増えている。まあ、こんなもんだと捉えるのか。なんとか指導しなくては考えるのか。

分布が正規分布的でなくて、1時間30分程度のところが落ち込んでいるのが気になる。勉強する学生とそここの学生との2極化?



Q5-②

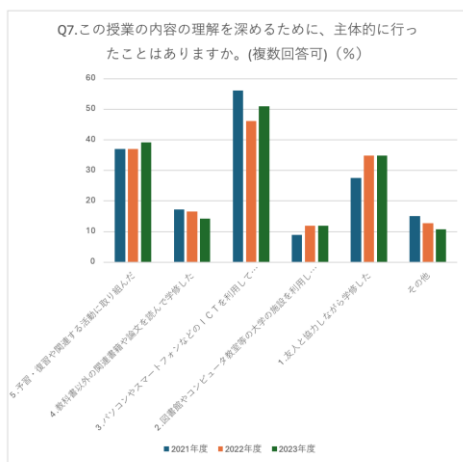
グラフを参考に、全体平均と比べて情報学部が上回っている項目で目立つものは、Q5でしょうか。授業外学

授業アンケートの活用

学修を示すQ5が全体平均より高いことから、情報学部のカリキュラムの特性や特徴が理解できそうな気がします。学科別に整理されていないので何ともいえませんが、メディア表現学科のカリキュラムの特徴、つまり、理論科目と実践科目のバランスが取れている点などが、結果に表れているように感じます。

Q7-①

Q7について、情報学部（専門科目）の部分を出出して3年間の推移グラフを作ってみました。



半数の学生がICTを利用して主体的に授業の理解を深めている。これはすごいことだ。現在の学生たちは熱心に大学で学んでいるのだと、解釈するのか、専門的な資料を参照する学生は1割強しかいないと悲観するのか。いずれにせよ、さらに数字を高くするために、授業や学習指導方法を改善しよう。そういうことです。

Q7-②

ICTの利用については、過去にもご意見があったと思いますが、その利用内容には幅や深さに多様なものが含まれている可能性が高く、この調査結果だけから読み取りができていないところがあると思います。(manabaを使うようなシンプルな利用でも該当してしまうので、嵩上げされていることも考えられます。)ただし、推測とはなりませんが、授業での学生の様子をみると、クラウド上のサービスに戸惑う学生が減っており、利用内容は高度化している可能性は十分あると思います。教員側も情報サービスを積極的に使うことを推奨している人が多いように思われ、ICTの利用が当たり前のものという雰囲気(情報

のハビトゥスのようなもの)が醸成されているのならよいなと思いました。また、深掘りするためには、今後は生成AIの利用のような調査項目もあってもよいのかなと考えました。

Q7-③

Q7の問いは、メディアに関することと、内容に関するものが混在しており複数回答可でもあるので、一つひとつの問いに対しての傾向を見ることとなりますね。その意味で、清水先生の過去3年間の推移を表した棒グラフがとても分かりやすかったです。メディアとしては、大学施設ではなくネット活用と友人とのコミュニケーションが中心であること。与えられた課題を解決するために文献などにあたるのではなく、手っ取り早く答が得られるものという解釈もできそうです。

Q9-①

Q9の問いでは、半数近くの学生が「非常に主体的に考える場面があった」としてはいますが、教科書以外の文献まで読む学生は少ない(Q7より)という結果を見ると、あくまで授業内の話のようです。授業内容そのものに興味を持ち学びたいと思えば、その分野での学びにもっと主体的になるかと思えます。

Q10-①

Q10の問い(学生同士の協働)について、全体平均と同水準となっていますが、実際はもっと高いのではないかと考えています。基礎演習などのグループワークの様子を見ていると、そこでの協働が最近接発達領域となっていると感じられる場面が少なくありません。そのため、協働の例を示す(継続的プロジェクト以外のグループワークなども協働に含まれる、など)と情報学部の実情が数字にも反映されるのではないかと思います。

Q15-①

の問いに対して、学問や研究への興味・意欲が「非常に得られた」と「やや得られた」を足すと74%。全体の3/4。一見、授業に対して興味を持たれている印象は

授業アンケートの活用

ありますが、あくまでその場限りのもので、そこからの主体的な探求までには繋がらなかったのかもしれませんが。

課題は「授業内での興味から、主体的な探求へつなげるために出来ること」だと思いました。

健康栄養学部

2023年度秋学期授業アンケート結果を利用したFD 活動

(1) 2023年度教育活動の振り返り、アンケートの結果に関する考察、意見交換の結果

目(や教員)によって差があった。

(2) 次期に向けた課題

(授業方法の改善、教育課程の改善など)

学問分野への興味関心や、新しい知識やスキルを得られた実感に関しては、健康栄養学部の学生はほとんどの科目で高いスコアを回答している傾向が見られた。実学的な学部であるため、「スキル」に直結する科目が多いことはその一因であると思われる。学問分野への関心については、論文の(わかりやすい)紹介などを行い、学問分野の専門的理解の促進に注意を払っている教員が多くいることがわかった。このため、興味関心のスコアが高いものと思われる。

2022年度の学部FD研修において「学生の自習時間の有限性」が話題になった。多くの教員が授業外学修の為の課題を課している状況にあって、やみくもに課題の量的負担を上げるだけでは逆効果(こなすだけになる事や抜け道の探索に走る)になる事を危惧したものである。それを踏まえて適度な授業外学修と主体的学習を促すための取り組みや授業改善をテーマとしてFDを行った。

多くの教員がアンケートの回収率の低さを懸念している。低い回収率では現状の正確な把握につながらず適正な改善に向けた方針が立てられないことは明らかである。紙のアンケートに戻すことを望む意見もでた。このため、今期の取組みを継続して学生の様子を観察していく姿勢の教員が複数みられた。

授業資料の改訂や充実、課題の質的改善・難易度調整、授業内容の改善を目指す教員が複数見られた。学習の焦点を絞ることで、時間の有効活用、時間管理や予定の立て方についての指導を行うなど学びの姿勢や準備に対して介入した事例、授業を録画した動画を事後配信することで授業外学修の促進につなげる事に成功した事例も報告された。対照的に、問題配布のみや、口頭指示のみの試みでは授業外学修の促しに奏功しなかったことが報告されており一定の工夫が必要であることが浮き彫りになった。アンケートの回答選択の中にある、「友人と協力」を“好ましい協働”と捉えるか、“不適切な共同作業”と捉えるかは科

回収率に関しては、対面授業の時間内でオンラインアンケートを行う時間を設ける(独自の紙アンケートと同時に進行する場合もある)ことで「前年比2倍」や80%近い回収率を達成した科目もある。一定の工夫が必要かもしれない。

国際学部

2023年度秋学期授業アンケート結果を利用したFD 活動

(1) 2023年度教育活動の振り返り、アンケートの結果に関する考察、意見交換の結果

疑応答は以下のとおりである。

国際学部教育研究推進委員の本浜先生より、最初に今回のFD研修会の開催目的とアンケートの実施方法についての説明があり、続いて「2023年度秋学期授業改善のためのアンケート」うち、国際学部の専門科目に関するQ5(授業1回あたり授業時間外の学修時間)とQ7(授業内容の理解を深めるために主体的に行ったこと)の2つの質問を中心にアンケート結果の説明があった。これらに説明に対する質

Q5(授業1回あたり授業時間外の学修時間)について

- 学修時間が多ければ望ましいという解釈をしなければならぬのか。授業によっては反転授業のように十分に予習が必要な授業もあれば、授業内のディスカッションを重視するような科目もある。学修時間の平均の比較にどれだけの意味があるのか疑問に感じる。

授業アンケートの活用

- 過年度と比較しても国際学部の平均学修時間の分布に大きな変化はなく、特に問題はないのではないかと。
- Q5の設問自体は学生の学修時間の実態を知る上で必要であるが、この結果から学修時間の多い少ないについて議論するのはあまり意味がないのではないかと。
- シラバスに記載している一科目あたり4時間という学修時間は物理的に無理があると考え。

Q7(授業内容の理解を深めるために主体的に行ったこと)について

- 選択肢にあるパソコンやスマホで調べることが果たして「主体的」な学修であるかは疑問である。
 - 授業でわからないことをパソコンやスマホを使って調べるのは「主体的」な学修と言えるのではないかと。
 - パソコンの利用に関して、BYODとの関連はどうなっているのか。
- 学長からの依頼を受けて、教務委員会と情報センターで検討が進められる予定である。
- 短期留学先にもパソコンを持参させているが、現地の授業でパソコンを使うかどうかは科目や先生による。

学生のよってもパソコン使用状況は異なる。

- 前任校と比較して授業な真面目に取り組んでいる印象はある。協調性のある学生が多く、グループワークやグループディスカッションがやりやすい。

(2) 次期に向けた課題

(授業方法の改善、教育課程の改善など)

- 昨年度も同様の指摘をしたが、これらのアンケート結果から学生の学修への取り組み状況を教員が把握することは可能であるが、教員自身が個々の授業のどの部分に問題があり、授業改善に具体的にどのように取り組むべきかを知ることは困難である。自由記述欄がない状況では、個々の授業に対する学生からの評価や要望は授業時にコメントペーパーで吸い上げるくらいしか方法がない。授業の課題が見えるような設問を考えてほしい。

経営学部

2023年度秋学期授業アンケート結果を利用したFD 活動

(1) 2023年度教育活動の振り返り、アンケートの結果に関する考察、意見交換の結果

事前にアンケート結果を配信し、各教員はそれを分析・考察した上で参加し、当日委員から補足説明を聞いた後に意見交換を行い、学部として取り組むべき課題について共有した。

2023年秋学期の集計値は、特にQ5(授業1回当たり授業時間外の学修時間)、Q6(学修への意欲的な取り組み)、Q7-5(授業内容の理解を深めるために、予習・復習や関連活動への主体的な取り組み)、Q7-3(授業内容の理解を深めるために、パソコンなどのICTの利用)、Q9(学生が主体的に考える場面)、Q10(学生同士が協同的に活動する場面)、Q14(新しいものの見方・考え方の取得)において、2022年秋学期より若干改善されていた。しかし、Q7-4(授業内容の理解を深めるために、関連書籍や論文を読んで学

修)、Q7-2(授業内容の理解を深めるために、図書館やPC教室などの大学施設の利用)、Q7-1(授業内容の理解を深めるために、友人との協力)の集計値が下がっていて心配であるが、Q13(知識・スキルの取得)やQ15(学問や研究への意欲)において、平均値同じで、評点5(非常に得られた)の割合が再び伸びていたため、経営学部としての取り組みは望ましい方向にあると考えて継続努力することとした。

1) 「Q5.授業1回当たり平均どの程度授業時間外の学修をしたか」について

「2時間以上・16.5%」・「1時間30分程度・18.9%」・「1時間程度・33.3%」・「30分程度・26.0%」と回答されており、平均値3.2(2時間以上・5、1時間30分程度・4、1時間程度・3の点数をつけて計算)を示して、前年同期の平均値3.0より高く、大学全体の平均値2.7や他学部の平均

授業アンケートの活用

値を上回っていて、改善傾向にあると考える。しかし、「1時間30分以上授業時間外学修」が35%程度でまだ低く、「30分以下」も3割位存在するので、授業に取り組む姿勢を強調するとともにもっと課題を課す必要があるという意見が出された。

2) 「Q7.授業内容の理解を深めるために、主体的に行ったコト」について

「⑤予習・復習や関連活動に主体的に取り組んだ・52.0%」・「③パソコンやスマートフォンなどのICTを利用して調べて学修した・46.5%」では、前年同期(⑤43.4%、③42.1%)、大学全体(⑤41.8%、③41.3%)より改善されていた。しかし、「④教科書以外の関連書籍や論文を読んで学修した・17.8%」・「②図書館やPC教室等の大学施設を利用し学習した・11.1%」・「①友人と協力しながら学修した・30.1%」では、前年同期(④18.1%、②12.3%、①32.2%)、47.0%、③52.2%)より低く、大学全体(④は同等、②12.7%)を下回っていて、特に「⑤友人と協力しながら学修した」については大学全体の割合ともかなりの差があって、各授業において、関連書籍の積極的な紹介やグループスタディなどをもっと積極的に取り入れた方が良いのではという意見が多数あった。

3) 「Q6.学修に意欲的に取り組んだか」について

「非常に・55.1%」・「やや・31.2%」の86%強の学生達が意欲的に取り組んだと回答し、前年同期(45.1%、38.8%)より高く、「非常に取り組んだ・5」が前年対比10%も伸びて、高い平均値(4.4、大学全体4.2)を示していたので、今まで通り継続努力することとした。

4) 「Q9.学生が主体的に考える場面はあるか」について

「非常に・56.4%」・「やや・27.1%」の83.5%の学生達が主体的に活動する場面があったと回答した。平均値も4.3で、大学全体(4.2)より高い水準であり、注意深く観察するとともにそのような場면을積極的に設けるよう努力することとした。

5) 「Q10.学生同士が協同的に活動する場面はあるか」について

「非常に・43.3%」・「やや・21.8%」の65.1%の学生達が協同的に活動する場面があったと回答した。平均値3.8は大学全体(3.6)より高い水準を示していたので、注意深く観察するとともにグループスタディなどを積極的に取り入れることとした。

6) その他の質問項目について

「Q13.知識・スキルがどの程度得られたか」について、平均値・4.2、「非常に・46.9%」・「やや・38.4%」で、8割強の学生が達成できたと回答した。これは前年同期の平均値(4.2)や大学全体(4.2)や他学部とほぼ同じ水準で、望ましい傾向にあると考えられた。そして、「Q14.新しいものの見方・考え方がどの程度得られたか」について、平均値・4.2、「非常に・45.6%」・「やや・36.6%」で、8割強の学生が達成できたと回答した。これも前年同期の平均値(4.1)より改善された数値で、大学全体(4.2)や他学部とほぼ同じ水準であり、望ましい傾向にあると考えられた。なおかつ、「Q15.学問や研究への興味・意欲がどの程度湧いたか」について、「非常に・42.1%」・「やや・36.6%」で、78.7%の学生が興味や意欲が得られたと回答して、前年同期の78.9%から少し低くなったが、平均値・4.1は大学全体(4.1)と同じ水準であり、今まで通り継続努力することとした。

(2) 次期に向けた課題

(授業方法の改善、教育課程の改善など)

「担任制度とゼミ指導教授を活用した教員間の情報交換とそれに基づいた学生指導」と「学生と教員間のコミュニケーションの活性化」を積極的に進めたことが、学生達の学修に良い影響を与えていたと考えられる。

しかし、「関連書籍や論文を読んで学修した」、「図書館やPC教室などの大学施設の利用し学修した」、「友人と協力しながら学修した」についてはまだまだ低く早急に改善策を講じる必要があると考えられる。

それで、改善策として、各授業において、授業に取り組む姿勢をしっかりと示すとともに、課題を積極的に課すこと、グループスタディや活動をもっと活用することが取り上げられた。

授業アンケートの活用

なおかつ、アンケート調査の回答率の低さも課題であると考えられた。前年同期の回答率よりも低くなっていて、経営学部の状況を正しく把握するためにも回答率を上げる

必要があり、その回答期限や回答方法などについて授業中にしっかり伝えることとした。

本学におけるFD・SD（2024年度）

開催時期	内容	主催
5月22日	2023年度コンピテンシー評価と学習成果の把握について	健康栄養学部
5月22日	「学習成果の評価指標」に関するFD（3観点による指導と評価）	国際学部
5月～6月	大学におけるハラスメント防止研修	ハラスメント防止委員会
6月	2023年度秋学期授業アンケート結果を利用したFD活動	各学部
7月17日	教員育成指標と「新たな教師の学び」をめぐる動向	教育学部
7月17日	栄養士・管理栄養士の歴史と業務の実際	健康栄養学部
10月30日	『2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）』と、その後の動向	教育研究推進センター
12月19日	学習成果の把握・評価と活用について（第1部・講演）	点検・評価委員会
2月13日	就職活動の現状と今後の学生支援について	就職委員会・キャリア支援部
2月19日	学習成果の評価指標に関するFD研修会 「修士学位論文審査基準を用いた自己評価の事例」	情報学研究科
3月3日	2024年度文学部FD研修会 「学位授与方針を踏まえたルーブリック評価実践報告会」	文学部
3月12日	2024年度言語文化研究科FD研修会 「学位授与方針を踏まえたルーブリック評価実践報告会」	言語文化研究科
3月19日	「学修成果の把握・評価と活用—人間科学部教務委員会の取り組みの現状と今後の検討事項—	人間科学部
3月19日	国際学部の入試動向に関するFD研修会	国際学部
3月6日～31日	学習指導上留意すべき著作権研修（研修動画）	学術情報部
3月24日	学習成果の把握・評価と活用について（第2部）	点検・評価委員会

本学におけるFD・SD(2024年度)

事務職員を対象とした研修

開催時期	内容	主催
4月～6月	新任職員研修:学園の歴史、人事制度、ビジネスマナー、PC研修ほか	文教大学学園
4月下旬	新任管理職研修:人事考課、労務管理ほか	文教大学学園
5月～11月	採用2年目研修: <社会人基礎スキル> ビジネスマナー研修(発展) <ITスキル> Microsoft Office社の各ソフトを実践利用ほか <文教職員共通スキル> 教育関連法令、教務事務基礎ほか	文教大学学園ほか
6月～10月	採用3年目研修: <社会人基礎スキル> タイムマネジメント研修、ビジネスデータ分析研修ほか <文教職員共通スキル> 学校法人会計、私学助成ほか	文教大学学園ほか
6月	入試アドバイザー研修	入試部
6月～11月	採用5年目研修: <社会人基礎スキル> 課題形成力養成研修(外部研修) <文教職員共通スキル> 学園人事制度ほか	外部研修 文教大学学園ほか
6月～9月	労務管理基礎研修(管理職昇任者)	外部研修
6月～11月	係長実践研修	外部研修
7月～10月	採用7年目研修:ビジネスコーチング	外部研修
7月～10月	課長実践研修	外部研修
8月21日	管理職研修: 人事考課、労働法等の改正	文教大学学園
10月～12月	採用10年目研修:キャリアの振り返りほか	文教大学学園
12月13日	採用8年目研修:チームビルディング	外部研修